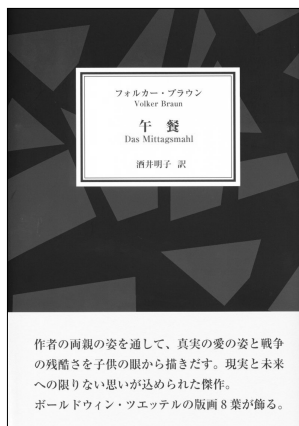


午餐

フォルカー・ブラウン 著 酒井明子 訳



浅岡泰子評

1939年生まれフォルカー・ブラウンは、もとも旧東独を代表する作家であり、その作品をつらぬく「社会批判的な視点」から、「旧東独の良心」とも目されていた作家である。その作品は、詩・戯曲・散文と多岐にわたっている。

2006年に出版されたこの「午餐」は、作者ブラウンの亡き父母を描いた小作品である。ブラウンの散文スタイルによく見られる「短い章」の積みかさねからなっている（本作品は、10章だて）。ブラウンの両親の生きた時代は「ナチスの時代」であり、父は兵士として戦場で若くして命を落とす。残された母には、5人のおさない息子たちを育てあげる戦後の50余年が待っていた。それは父にも母にも、「戦場の人生」であった。男も女も、社会体制の中で生きるほかないのだが、その中であって「男と女の永遠性」が、この作品に結実されている。とくに作家ブラウンには、「芸術家としての性向」を持っていたらしい父親への、哀惜の念がにじむ作品となっている。父の「美への接近の軽卒さ」、「突拍子もない行動」、「誇り」などなど。

しかしその文体は、当然ながらブラウン独自の

「諧謔精神」に味つけされている。「本質的に詩人（それも諷刺詩人）」であるブラウンの文章は、「暗喩や引用文」が多用されて、しばしば理解に苦しむことも少なくない。テーマが両親に向けられた場合は、さすがにそうした「晦渋」は影をひそめ、「情愛」が全面にあふれ出ている。それでもブラウン一流の、ことばの二重性、ことば遊び、語の大胆な飛躍、意図的なナゾかけはそこそこに満ちている（すでに父の名前 Erich からして、Erich の二重性をおびて表明されている）。また文中の「人称代名詞・所有形容詞のゆるい使用・多用」などは、読むものを混乱におとし入れる。だが作家の意図（遊び）は、まさにそこにあるのだろう。

こうしたブラウンの文体の「語の飛躍や多義性」は、「日本語化不能」でもあり、じつに翻訳者泣かせであるが、時間をかけて読みこんだうえの、よい訳業である。また入念な注も、おおいに理解を助ける。

フォルカー・ブラウンの作品は、すでに翻訳も数冊あり、日本人に愛好され将来にわたっても、研究される作家である。ここにまたひとつ、ボールドウィン・ツェッテルのエッチングがイラストとして華をそえる、フォルカー・ブラウンの「愛蔵本」とも言うべき作品が訳されたことを、心から喜びたい。

『午餐』（2017年）

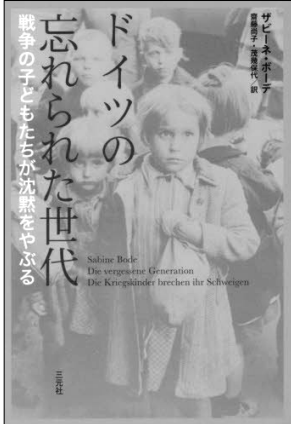
フォルカー・ブラウン著 酒井明子訳

鳥影社 本体価格 1500円

Volker Braun: Das Mittagsmahl (2007)

ドイツの忘れられた世代 戦争の子どもたちが沈黙をやぶる

ザビーネ・ボーデ 著 齋藤尚子・茂幾保代 訳



松浦恵美子評

ドイツ国民は第二次大戦末期、大規模な空爆を経験し、東部地域の領土喪失により敗走、追放、移住を余儀なくされた。兵士だけでなく銃後の非戦闘員が受けた物的、精神的被害は甚大で、彼らはトラウマを負って戦後を生きた。特に 1930 年から 45 年生まれ「戦争の子供たち」の世代は、「3 分の 1 が今日もなおその後遺症に苦しんでいる」。ナチス犯罪に加担したという加害者意識の前に、彼らは心の傷を隠したまま、或いは自覚すらできないまま成長した。著者はこの世代の封印された戦争体験、戦後の生活についても聞き取り調査を行ったが、その過程である困難に直面する。過去のトラウマを呼び起こすことへの拒否的な姿勢や感情的な反発である。そこにはドイツ国民自身の「ユダヤ人虐殺加害者としての後ろめたさ」があり、自らの被害を自覚し申し述べることですら道義的に許されないと、心理的自縛に陥っていた。反ナチズム、ユダヤ人虐殺への加害者としての発言は推奨される一方、「戦争の被害者」としての発言を躊躇し心に蓋をしてしまう。とはいえ、この種の調査にはタイムリミットがある。生存者に聞き取りできるほぼ最後のチャンスを活用し、こ

うした調査が一冊の本として刊行された意義は大きい。

本書は個々の事例を記録した単なるルポルタージュではなく、社会学、教育学、医学などの学術的記述や事例が豊富に紹介されている。世界的なトラウマ研究の紹介もあり、現代的な問題としてトラウマを考える手掛かりを提供している。さらにこの書物の特徴として明記したいのは、この世代の経験を反映した様々な文学作品が引用されていることである。これらによって「戦争の子供たち」の世代の体験を間接的ながら、より生き生きと体感できるメリットがある。例えば作家 D・フォルテは、執筆中に子供時代の記憶が戻って来た時の体験を記している。これは、この世代の封印された記憶とその開放を目の当たりにすることができる貴重な記録である。また W・ボルヒェルトの『ネズミも夜は眠る』には、爆撃で破壊された家屋の下敷きになった幼い弟を、ネズミに食われないように夜も寝ずに見守る兄が登場する。この少年に救いの手を差し伸べようとする見知らぬ年若い男。出口のない時代に放り出された子供たちの心情に共感するとともに、暗闇の時代にも灯されるヒューマニズムの光は、読む人の心の慰めとなろう。最後になったが、多岐にわたる体験者の話を丁寧に訳出された訳者諸氏に、敬意を表したい。

『ドイツの忘れられた世代 戦争の子どもたちが沈黙をやぶる』（2017 年）

ザビーネ・ボーデ著 齋藤尚子・茂幾保代訳

三元社 本体価格 3400 円

Sabine Bode: Die vergessene Generation – Die Kriegskinder brechen ihr Schweigen (2014)

グリム兄弟と表象文化

—モチーフ・ジェンダー・ステレオタイプ— (野口芳子退職記念論集)

大野寿子 編



植朗子評

本書には、日本を代表するグリム研究者・野口芳子の退職記念論集として、大野寿子が編者となり、グリムに関する論文や翻訳が集められている。副題に「モチーフ・ジェンダー・ステレオタイプ」とあるように、多角的な視点から論じられている。プロローグにはハインツ・レレケからの寄稿文が掲載されているが、この豪華なプロローグにはじまり、内容やテーマの多様性は、グリム研究者必読の書であることは間違いない。

第1章では、橋本郁子の訳によるペルンハルト・ラウアーの論文で、「グリム兄弟にメルヒェンを伝えた女性」が論じられている。浜本隆志は「白雪姫」を中心に、近親婚に関する神話とメルヒェンの系譜について、前田陽子は児童文学者として活躍した巖谷小波が紹介したメルヒェンについて、沖島博美は日本人芸術家による初のグリム童話展を紹介している。

第2章はグリム兄弟論として、野口芳子による、ヤーコプ・グリムを訪問した幕末の日本人に関する論考があり、つづいて、村山功光によって、グリム兄弟が伝承文学に見出した「古代」が、近代

歴史学に対して批判を含むものであったことが明らかにされている。横道誠は「ロマンストとしてのヤーコプ・グリム」と題して、ロマンセとグリムとの関係性を指摘した。

第3章は「モチーフの変遷と展開」として、稲毛理津子・野口芳子訳のボッティックハイマーによる「アラビアンナイトとグリム」に関する論文が、そして鶴野祐介によって「子殺し」のモチーフ、前原澄子によって死者による報恩譚が解説された。

第4章では、「社会的役割と家族」をテーマに、ジェンダー学的視点から、谷口秀子、玉井章、西尾亜希子、中山文、金城ハウプトマン朱美による論考がおさめられた。

第5章では、「視覚的にうったえかけるもの」の中に「民間伝承の姿」が感じられる事例が紹介されている。齊藤公輔はテレビ映画『ニーベルングの指輪』を取り上げ、「ニーベルング伝説」のモチーフ改変の事例について述べている。神話の再創作化、あるいは変遷の事例として関心を惹く。また編者でもある大野寿子は、2015年に行われた「ヨーロッパのメルヒェン世界 - グリム童話と挿絵の黄金時代」として、美しい図版とともに、数々の挿絵について紹介している。溝井裕一は、メルヒェンのともいえるモチーフ「水族」を取り上げ、古代から中世ヨーロッパにおいて、この不思議なモチーフがいかに人間と関わってきたのか論じた。

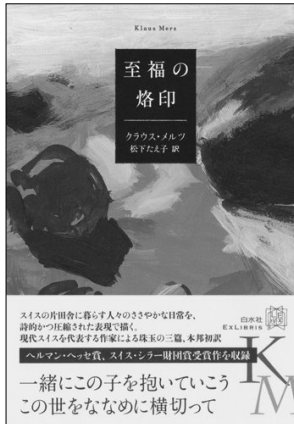
文字数の関係もあり、すべての内容についてここで触れることはできなかったが、野口の退職に寄せられた数々の論文、翻訳、コラムは、野口のこれまでのグリム研究への貢献の大きさを如実に示している（文中敬称略）。

『グリム兄弟と表象文化 — モチーフ・ジェンダー・ステレオタイプ —』(2017年)

大野寿子編 勉誠出版 本体価格 4600円

至福の烙印

クラウド・メルツ 著 松下たえ子 訳



熊谷哲哉評

本書はスイスの作家クラウド・メルツの短編小説集である。1945年にスイスのアールガウ州アールラウに生まれたメルツは、教員として勤める傍ら詩や小説を発表してきた。メルツの作品はすでに高く評価され、ヘルマン・ヘッセ賞（1997年）、ゴットフリート・ケラー賞（2004年）、スイス・シラー財団賞（2005年）などスイス内外の数多くの文学賞をうけている。メルツについては、スイスのゲルマニスト、ペーター・フォン・マットらによる研究論文も書かれている。

本書には、「ヤーコブは眠っている 本来なら長編小説」（1997年）、「ペーター・ターラーの失踪物語」（2005年）、「アルゼンチン人 短編」（2009年）の三つの作品が収められている。

「ヤーコブは眠っている」は、メルツ自身をモデルにしたと考えられる、1950年代から60年代ごろのスイスの家族の物語である。語り手の「ぼく」と水頭症で「太陽」と呼ばれた弟、パン職人でてんかん持ちの父、手品が得意な叔父や、孫たちのために養蜂を始めた祖父らと過ごした少年時代が描かれる。

「ペーター・ターラーの失踪」は、ターラーが突然姿をくらましたのちに、自分の人生を回想しながら山へ出かけ、そこで滑落事故による負傷で亡くなるまでの物語である。ターラーを亡くした友人や家族による回想から始まり、途中で母の死を看取る場面が断片的に挿入され、最後はターラー自身の死で終わる。

「アルゼンチン人」は、同窓会で再会した旧友レナから聞いた祖父の人生を描いている。スイスからアルゼンチンに渡った祖父は、花粉症のためガウチョになる夢を諦め、ダンス教師として生計を立てたのちにスイスへ戻り、教員として過去を封印して生きた。語り手の「私」は、聞いた話を祖父の物語として語る。

三作に共通しているテーマは回想することである。作品の主人公は、過去の思い出やかつて生きていた家族のことを回想する。出来事とともに、故人がいかにか死んだかも同時に思い出される。メルツの描く登場人物たちは、回想という行為で何をしているのだろうか。失踪したターラーが母との死別を思うと同時に自らの人生を振り返るように、回想とは他者を思い出すと同時に自分のいる場所、自分の過ごした時間を振り返ることでもある。

タイトルの「至福の烙印」とは、「ヤーコブは眠らない」の主人公「ぼく」が語る幼少時代の負傷の痕跡のことである。子供時代の無茶な遊びや不注意による傷は、年月とともに治癒し、痛みは消えていく。しかしその痕はふとしたきっかけで人を回想へと誘う。メルツの作品は、私たち自身が持っている「至福の烙印」の存在を思い出させる。

『至福の烙印』（2017年）

クラウド・メルツ著 松下たえ子訳

白水社 本体価格 2400円

Klaus Merz: Brandmale des Glücks (2014)

ヴィルヘルム・ミュラーの生涯と作品 -「冬の旅」を中心に-

渡辺美奈子 著



末松淑美評

ヨーロッパの人々が新しい国のかたちを求め葛藤した 19 世紀前半を、詩人ヴィルヘルム・ミュラーもまた熱く生き抜いた。この本のページの間からは、ミュラーの体温が伝わってくる。ミュラーは学業を中断し、対ナポレオン解放戦争に志願し、戦場に赴いていたのである。『冬の旅』を聴くとき、シューベルトの孤独や恋の痛みを想像し、ピアノの美しい情景描写を楽しみ、詩人ミュラーをなんとなくさすらい人に重ねていただけの自分を反省し、この本とともに詩人の人生を訪ねる旅に出た。

本書は、序章で研究方法を説明したのち、第 1 章から第 6 章にかけて、ヴィルヘルム・ミュラーの生涯を、詩の表現と関連付けながら丁寧に描いてゆく。職人の家庭に生まれながらも教養人を育てるハウプトシューレに通った「少年期」(第 1 章)、祖国を思う心と戦争の苦しみを体験した「解放戦争従軍時代」(第 2 章)、道ならぬ恋に深く傷つき軍を追放されて帰る「ブリュッセルから故郷へ」(第 3 章)、仲間と詩作に励み、格調高く豊かなドイツ語を目指して活動した「ベルリン時代」(第 4 章)、イタリア文化に親しみ、文学者たちとの交流で民謡・民衆詩への関心を膨らませた「成熟期」(第 5 章)。

この頃ミュラーは故郷デッサウで職を得て結婚し、二人の子どもにも恵まれる。『冬の旅』執筆開始もこの時期である。そして 30 代前半で迎える「晩年」(第 6 章)。

しかし、この本のクライマックスはそれに続く終章である。第 1 曲目「おやすみ」の音韻および楽曲の詳細な分析が行なわれる。第 1～6 章の伝記はこの終章のためにあると言ってもよい。詩節ごとに表情を変える脚韻・頭韻・母音の重なりと明暗の分析とともに詩を読むと、第 1～6 章で見た風景の断片が目の前に浮かんでくる。第 1 詩節の「よそ者として (fremd)」という形容詞一つ取ってもそうである。ただの見知らぬ町ではなく、ブリュッセルを追放されて一人故郷へ帰る情景とミュラーの締めつけられるような胸の痛みが重なる。「道 (Weg)」にも新しい情景が加わり、「雪 (Schnee)」にも冷たさ以上の意味合いが感じられる。ことばの意味の世界が、具体的な情景や感覚・感情を伴って広がり、そこに詩の音とリズムが加わり、さらに歌とピアノによる楽曲全体と結びつく。最終分析は、複合的な芸術の秘密を紐解いてみせるフィナーレと言えるであろう。

著者は終章で、〈詩人ミュラーと「同じ心」を持ったシューベルトは… (中略) …ミュラーのことばから旋律を聞き出し、それをミュラーに返す〉と書いている。詩人と作曲家の奇跡の出逢いを感じることでできる貴重な一冊である。

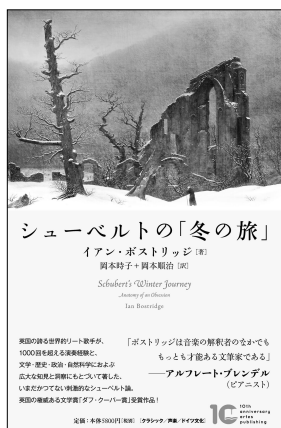
『ヴィルヘルム・ミュラーの生涯と作品 —「冬の旅」を中心に—』(2017 年)

渡辺美奈子著

東北大学出版会 本体価格 4000 円

シューベルトの「冬の旅」

イアン・ボストリッジ 著 岡本時子・岡本順治 訳



落合直子評

テノール歌手でありオックスフォード大学で近代史を専攻、博士号を持つ学者がシューベルトの『冬の旅』を解明する。原書は英国最優秀ノンフィクションに与えられるダフ・クーパー賞を受賞した。

『冬の旅』では主人公の旅人がさすらう理由や元となる恋愛の経緯は明かされない。ボストリッジは音楽の謎を分析するとともに『冬の旅』生成の源となる 1820 年代というミステリーを調査する探偵となる。見えてくるのはナポレオン失脚後のメッテルニヒの弾圧体制に抑圧感をつのらせる文化人や大衆の姿だ。危険な教授や詩人の追放、出版物の検閲に旅行の制限。政治犯や道德犯を過酷な罰則で取り締まる。集会は書類の押収。10 章「休息」の挿絵の『思想家クラブ』という風刺カリカチュアでは、討論し合う全員の口が白布で縛り上げられた陰鬱な集会在描かれる。シューベルトはミュラーの詩に微かな政治的メッセージを発見し、戦略的に詩を自分の歌曲に作り替えた。ボストリッジはその行為を「物語性の追放」と見て、シューベルトが言葉と音楽をダイナミックに合わせる作曲の瞬間に入り込む。彼は歌曲の謎から

むフリードリヒの絵画や資料をふんだんに取り入れ、多様な分野に接続する論考に説得力を与える。

主題は「除け者のさすらい人」。冒頭の *fremd* の語が「近代」への糸口となる。例えば 1820 年代までのドイツ民族国家問題とオーストリアの関係。この時代にドイツ人として生きるとは「除け者」になることだった。さらに科学上の発見や地球の歴史発見が、絶対的であったキリスト教の教理を揺るがせ、人々に「統一感の喪失」をもたらし、キリスト教教理に反する思想が生まれてシューベルトも影響を受ける。人々の心から神が消え「孤独」が生まれた時代に、近代性を伝える手段として『冬の旅』が作られたと言える。いわば *fremd* は 20 世紀の全思想の前兆となった「疎外」の始まりなのだ。

1820 年代の結婚は「所得能力と収入の証明」が必要で、金銭の束縛を嫌うシューベルトは結婚に門前払いされていた。13 章「郵便馬車」は技術革新と近代性の輝きを放つが、19 章「惑わし」では庶民のダンスが「社会的不穏さの温床」と警察に狙われる。『冬の旅』には常に社会の抑圧と不安定さが潜む。シューベルトが意図した曲目構成の変更では彼の思想の変遷が見える。「勇気」「幻の太陽」の入れ替え。「勇気」の騒々しさと歌詞の冒流性を際立たせ「幻の太陽」ではロマン派と科学研究が交錯する世界観を描き「非音楽的要素」の終曲に着地する。「라이어まわし」では楽器分析やボブ・ディランに接近。異界への旅とも言える。

本書は全国紙や多くの書評で広く紹介された。ボストリッジの原書に即した装丁による本書は美しく豊潤で、すべての読者を魅了する。

『シューベルトの「冬の旅」』（2017 年）

イアン・ボストリッジ著 岡本時子・岡本順治訳
アルテスパブリッシング 本体価格 5800 円Ian Bostridge: Schubert's Winter Journey
Anatomy of an Obsession(2015)